

レポ ー ト



スチュアートの「大学拡張に関する書翰」を読んで

全日本大学開放推進機構理事長 香川 正 弘

1. 「大学拡張に関する書簡」(1871 年)

大学開放の関心のある人は、「大学拡張」・「大学開放」とは本来どういう意味だろう、また、どうあるべきか、ということを考えるであろう。この間に対しての解答は、大学開放がなぜ始まったのか、そしてどのようにして成立し、国民生活の中に定着していったかを知ることによって得られる。研究で云えば、大学開放の発生史研究によってその理念を、成立史研究によってその運営の原則を学ぶことができる。何事でもそうであるが、起源を探ることによってその事柄の本質を知ることができる。これは私たちの生活でもよく日常的に行っていることである。たとえば、ある大学がどのような大学かということ知りたいときに、その大学の創立者は誰か、創立の理念や校是はどのように掲げられているかを知ろうとする。創立の理念は、百年経とうと変わるものではなく、それがしっかり確立し普遍性を有していればいるほど、その組織は永続的に発展していくものである。大学開放も同様に理解すれば、その在り方を知ることができる。

大学開放の宣言は、各大学や団体がこの事業を行うときにパンフレットに記載されているが、概して普遍的なことが述べられていて、新しい道を拓いていくという血の滲むような労苦がそこには感じられない。ここに取り上げる「大学拡張に関する書簡」は、その意味で我々が目にする大学の大学開放開始の趣意書とは異なるもので、この文書によって今日の大学開放の道が拓かれたという意味で、歴史的な文書である。これは 1871 年にケンブリッジで発表され、1873 年に同大学は実験的に大学拡張講座を実施し、その成果をもって 1875 年に正式に大学の事業として実施することを決めた。このことから、この書簡は「大学拡張の礎石」ともいわれるし、マニフェストともいえ、大学開放に関係する人たちの必読の文献となっている。アメリカでも大学拡張を導入するに当たってはまずこの文書を私のものとするための努力が行われたし、我が国でも邦訳が二つも刊行されている。

このように我々にとっては必読の文書であるが、理解するのは容易ではない。なぜなら、1845 年から 71 年にかけてのオックスブリッジにおける大学改革の進展と成人教育の現状を知っておかないと、解釈ができないからである。そういう意味では、特殊イギリス的な文書であり、1871 年の時点ではともかく、1875 年以降にケンブリッジ大学が作った大学拡張の広報紙の方が定型化されて有用

であったと思われる。しかし、特殊イギリス的とはいえ、百年以上にわたって今日まで大学拡張を規定してきたのは紛れもなくこの文書であり、そこには今日的な問題意識で読んでみても、新鮮な指摘と提言がある。大学開放はそれぞれの国の教育の発達度合いによって違うのだ、と主張することはできるが、国際的な学術用語である「大学拡張」の定義に合わないというのは問題であろう。

この文書は 1871 年 11 月 23 日に弱冠 28 才のジェイムズ・スチュアートがケンブリッジという大学町に在住している教員に宛てて出した公開書簡である。その主な内容を掲げると、「人々は組織的な高等教育を求めている」、「それは継続的で徹底して学識のある人によって提供されねばならない」、「誰が教師になるべきか」、「大学拡張の二つの方式は、巡回講座と地方拡張カレッジの創設である」、「受講生になるのは誰か、労働者、女性、そして教職にある人が重要である」、「大学拡張の組織化」、「大学拡張は在校生を減らすことはない」、「大学という団体こそ高等教育の需要の応える義務がある」、「高等教育の需要を醸成・育成されるべきである」というもので、全文で 21 節から構成されている。

本稿では、我が国の大学開放の実践にとって、考え直さなければならぬと思われる「大学拡張の対象」と「拡張講師」に関する提言を取り上げ、今日的な視点から解釈してみたい。

2. 大学拡張と大学開放という用語

本稿でも、大学が社会人教育を行うことを大学開放と称したり大学拡張と称したりする。いったいどうなっているのかという問題がある。この用語の問題は悩ましい問題で、我が国では、大学公開講座、大学開放、大学の生涯学習センター、エクステンションセンターというような用語が使用されていて、全体を表す言葉として大勢は「大学開放」が一般的、学術用語としては「大学拡張」となるのではないかと思われる。原語は University Extension であり、Extension を開放と訳すには無理があるので、最近ではエクステンションという用語が市民権を得る傾向にある。

用語論になるとひとつ長い論文を作る必要がある。で簡潔に言えば、イギリスでの大学開放の議論の始まりは、1834 年に宗教による大学入学制限を撤廃してすべての国民に開くということからであった。この時の法案は、大学に入学するに際して信仰による宗教的な障害が設けられていて、それを撤廃して、学びたい人にすべて開放しようという法案であった。このような急進的な法案が通るわけがなかったが、後への影響は大きかった。1845 年から国教徒の子弟で有能な若者に大学を開くこと (to open/ to throw open to) が問題とされ、それが大学拡張の名前で表現された。奨学金の充実と一部国教会の宣誓署名を免除することでその一部が実現されてから、中流階級の女性への門戸開放が問題となった。ここでも大学拡張という用語で論じられた。また、当時のオックスブリッジの大学生は大学に居住するのが義務であったので、学内施設を拡大すること (to enlarge the University/expansion of the University and Colleges) も大学拡張で論じられた。

これらの沸騰する議論は大学拡張で論じられたが、実際は大学内に有資格の若者を呼び込む大学開放が問題であった。故に、大学拡張のなかでの大学開放は、大学教育を受けられる学生増を論じるこ

とを意味する言葉であることがわかる。こうした歴史的な流れの中でまったく新しい発想で出現したのが、スチュアートが大学構外で社会人に対しての大学の授業であった。これは地方都市の中流階級の女性団体や労働者団体の要請に応じて行った理系の講座で、大学という施設内でないと大学教育はできないという発想を棄てて、学外にも動かして行う事が出来ることを実証したものであった。実践中は、これを逍遙大学 (Peripatetic University) と表現していたが、ある時リーズの女性団体がスチュアートの演説をパンフレットにすると、大学拡張と表題を付けたので、スチュアートもケンブリッジ在住教員への建白書でも「大学拡張」と表現することになり、以後、大学教育を受けたいと思う社会人に開かれる授業を「大学教育の拡張」 (Extension of the University Teaching)、約めて「大学拡張」というようになったのである。

この歴史的な論議に鑑みて考えるならば、大学開放というのは主に正規の学生になる若者の枠を拡大するときに使用される言葉であり、大学拡張は主に地理的、対象的な拡張を意味する言葉であることがわかる。地理的とは学内から学外の地方都市での大学教育の提供、対象の拡張は学歴の有無にかかわらず、大学教育で学びたいと思う社会人すべてということになる。最初、大学拡張では大学構外での教育に力点があったが、次第に対象の社会人が学ぶということへと力点に移り、構内構外の区別なく使用されるようになっていったのである。我が国の大学開放はすでに制度的に完成していることで、必要なのは大学拡張という用語と考えを普及させることにあるといえる。

3. 大学拡張の対象

19 世紀中葉におけるオックスブリッジの大学改革は、国民のための大学になることを目指して行われた。そのための障壁は、大学宗教審査法で規定された国教会 39 条の宣誓署名を撤廃することと、高価な大学生活を低廉にすること、それに施設を拡大して収容学生数を増やすことであった。宣誓署名は 1871 年の大学宗教審査法廃止法の成立でもって非国教徒が入学することができるようになり、学生生活の低廉化は奨学金の充実と、1869 年に下宿の認可により可能とされた。つまり学内における大学開放体制が 1871 年にはできたということである。これを受けて、「大学拡張に関する書簡」はその冒頭の 1 節で、「我々の大学をすべての階級に以前よりもより近づきやすいものにするこへと大きな飛躍を遂げた」、「すべての男子に大学教育の門戸を開放した」(1 節)と述べている。

しかし、実際には、まだ「すべての人々」に開放されたとは言えないというのが彼の問題提起であった。すべての人々には、女子があり労働者が含まれる。「数年間にわたって継続的な余暇を作り出せるあのような階級」は数が少なく、ほとんどの国民は、「継続的な余暇を思うままに掴み得ない人びと」、また「どうしても大学に寄宿することのできない事情のある階級が広く存在しており」(1 節)、そうした人々を考慮しないなら、国民の大学たり得ないことになる。そうした人たちの中にも「系統的な性格をもった高等教育を求める願望が広範に存在している」ので、特に「教育を受けるには本人の側に個人として継続的な努力が必要であることについて、十分に理解し、そのためには実際の労苦を厭わない積極性を伴っている願望」(1 節)をもつ人々に対して、大学は何らかの教育を提供しなくては国民の教育施設にならないというのである。

スチュアートが大学拡張の対象にしたのは、日々忙しい日常生活を送りながら、大学教育を受けたいと願う人で、しかも単なる願望ではなく、「個人として継続的な努力が必要であることについて、十分に理解し、そのためには実際の労苦を厭わない積極性を伴っている願望」の人を意識していることである。このことは、大学拡張講座が単に講義が 12 回開かれるというだけではなく、クラスでの討議、毎回の課題レポートの提出、指定した文献の読書、最後に試験を実施するという大学教育そのもので行なわれることを受け入れる覚悟のある人を対象にすべきであるということで、時間消費とちょっと大学教育の雰囲気に触れたいというような人は除外しているのである。男女で区別せず、過去の学歴も職業も問題とせず、ただ課題意識が明確で、知の探求に熱意がある人があるならば、その願望を果たせるように手助けするのが大学人の義務であるというのである。

この大学拡張の対象の捉え方は、我が国にとっても参考なることである。我が国で行われている多くの大学開放講座は、誰にでも開かれている。それが公開の原則に叶っていると思うからであろうが、覚悟ある受講態度を受講生に求めているであろうか。むしろ、誰でも受け入れ、誰でもが理解できるようにという意識が働いて、本来の大学教育の開放になっていないのではないかと思われるところもある。イギリスの場合、大学拡張講座の受講生は単なる授業を聞いている聴衆 Audience ではなく、拡張学生 (Extension Students) と呼称されるように、指導する対象として措定していて、それならば大学が社会人教育を行う意味があるというのである。公開の原則は宗教派、性差、学歴差を問題とせず、すべての人に開くということであるが、特定の職業集団を意識した講座の開き方も、この文書からは読みとれる。この当時、教職制度が整いつつある時期で、専門職化が志向されつつあった。この専門職に対応した講座も公開の原則の下で意識されていたことは重要である。現在も大学教育は専門職やスペシャリストを養成するところとなっており、またそれこそが大学の特色ある学問成果に裏付けされた教育でもあるわけで、これを今日に当てはめてみると、専門家を対象にした講座が開かれるということになる。実際に提供されている大学開放講座を見ると、我が国では多種多様な職業集団の専門的ニーズにあった講座がいかに少ないかもわかる。スチュアートが、大学公開講座は我が大学の広報活動の一環のために行うなどと聞くと、びっくりするに違いない。

4. 拡張講師

スチュアートは、自ら大学教育をモデルにした講座を各地の中流階級の女性団体や労働者団体に行い、そこで人々の真剣で高度な学習要求を各地で見て、このような学習ニーズを放置しておくことはできないと考えた。そこには社会人の学びに対しての深い愛情と共感があった。彼の講座はシラバスに基づき、指定図書を読書を課し、クラス討議、毎回の講義の後にレポート提出を伴うもので、今までにない新しい講座であり、自ら「科学的講座」と称した。この実践を通じて市民に高度な学習ニーズがあることを確信したので、スチュアートは、「メカニックス・インスティテュートなどで行われている例の民衆講義の場合に頻繁に見受けられるように、民衆がパンを求めているとき石が与えられたりしてはならないのである」(1 節) というのである。

当時の大人の教育は、この引用文にもあるように「民衆講義」とか「成人教育」という用語が用いられていたが、その主流は地域にある階級別と男女別で設けられたクラブ団体での相互学習会にあ

り、そこでは名士や学者を講師として招聘し学習することがはやり、内容的には通俗的なことが多く見られていた。その欠陥について、スチュアートは、対面授業と個人教授の必要性を強調することから、指導する講師の問題を次のように指摘する。

我々は、一方で、(幾人かの優れた例外は別として)、労働階級への継続的な高度な種類の教育を提供しようとする教師たちが、十分な学識を持ち合わせた人でないことを見出す。なんとなれば、個々の場合がどうであれ、教師のクラスは与えられる給与の額によって決定されるからである。他方、学識の高い人が採用されるとき、その授業は一般にあまりに断続的であって授業の名に値するものではない。授業が連続性のないコマギレで行われるのでは、決して真の教育とはなり得ない。
(3 節)

ここでの重要な指摘は、「真の教育は、継続的でなければならないし、また十分学識のある人から与えられるものでなければならない」(3 節)ということに尽きるであろう。「継続的であらねばならない」ということについては、次のように述べている。

いかなる人の教育でも、その過程は、同一教師の一定期間にわたる継続的な指導が必要である。したがって、連続する教育過程の部分に間隔があるにしても、それらの部分部分は互いに織り合わされたものでなければならない。

このことは、例えば 12 回構成の講義で成り立つ講座の場合でも、同一講師が一貫して担当し、講座設定の設置趣旨、並びに講座を受講してどれだけの学力を付けるかという設定された目標を達成するように全責任を負うことを云っているのである。

また、社会人を対象に講義をする講師の場合、「学生が無知であればあるほど、また、日々の糧を獲得する仕事に従事しなければならない必要があればあるほど、そのような学生を教育しようとするものは、自分が教えようとする水準を遙かに超えてその担当科目によく精通しているということが必要となる」(4 節)という。講師は、専門分野で卓越しているだけでなく、生活と学問を結びつけて講義をしなくてはならない、というのである。

また、スチュアートは、こうした仕事は大学が行うのが最も適しているとも主張した。これは当時も現在もまったく同じである。大学には専門家を養成する専門家が教授としていて、その教授たちは、固有の研究テーマを持ち、専門分野に関して国内はもとより世界中の情報の最先端に常に接触し研鑽している人たちである。人々の高度な実践的な学習要求に応えるには、学問の方法を教え、更に自分で探求できるように育てていくことが重要で、それができるのが大学の教授であるからである。ただし、高い学識があるという点で見れば、大学の現役の教授だけでなく、オックスブリッジの卒業生も社会での専門家も含まれる。大学を出て仕事に従事しながら専門分野を究めた人材は豊富であるから、彼等も講師に汲み入れたのは云うまでもない。

私は、「大学拡張に関する書簡」の中で最も重要な指摘はこの講師の箇所であると思っている。イギリスでは、この提案以降、輪講はなくなり、成人教育の「教育」が確立し、専門職としての講師と組織者が出現し、講座と演習形式（チュートリアルクラス）の学習や体系的な学習が広がっていくことになった。スチュアートが大学拡張でモデルにしたのは学内で行われている大学の授業であって、それを社会人向けにアレンジし直したものであった。これは、大学の教育機能を学部学生と社会人学生に分けて考えたもので、地方都市との連携を強化し、専門職員を配置する事務局を持つことを予想し、その時にこうした事業を大学の第 3 の機能として位置づけようとしたのである。

講師の問題は、現在の我が国の大学公開講座を考えると、最も欠けている視点を提供していると思われる。輪講が多く用いられ、講座の形式が整えられておらず、講師の指導についての責任も明確にされていないし、修了証も意味あるものかどうか曖昧であるなど、問題が多数発見されるであろう。このスチュアートの文書は昭和 49 年には既に翻訳され公表されていて誰でも読むことができる状態にあるが、専門家にすらほとんど読まれていない。たとえ読んでいたとしても、日本での実践に引きつけて理解しているとは思えない。欧米でいう「知識基盤社会」へ入って行かざるを得ない我が国が、暗中飛躍を図るには、国策として遅れている大学拡張を発展させていく以外にない。そのためには時々原点に戻って、自分たちのやっていることを吟味することが必要である。

<参考文献>

- (1) James Stuart, *University Extension, Being the Substance of an Address Delivered First at the Request of the Leeds Ladies' Educational Association*. Leeds: The Association, 1871.
- (2) -----, A Letter on University Extension, Addressed to the Residents of Members of the University of Cambridge. Cambridge: [The Author], 23 November 1871.
- (3) The Foundation Stone, 1871. A Letter on University Extension, Addressed to the Resident Members of the University of Cambridge, by James Stuart. Trinity College, 23rd November, 1871, *The University Extension World*, 1-3, March 1893, 52-54.
- (4) 香川正弘「J・スチュアートの大学拡張提案に関する覚書」『研究紀要』四国女子大学・四国女子短期大学、第 15 号、1974 年 9 月、5-21 頁。
- (5) 坂根治美訳「イングランドにおける大学拡張: ジェームズ・スチュアート『大学拡張の父』」、『研究ノート 大学と社会』東北大学教育学部附属大学教育開放センター、20 号、1991 年 3 月、80-88 頁。

香川 正弘 (かがわ・まさひろ)

1942 年広島市生まれ。広島大学大学院教育学研究科教育行政学専攻博士課程単位取得中途退学、教育学博士。四国女子大学講師、佐賀大学講師・助教授・教授を経て、1992 年から上智大学教授、2008 年に退職、同大学名誉教授。生涯学習・社会教育研究促進機構理事長、健康・生きがい開発財団評議員、修士論文「イギリス大学拡張の原初形態」（1968 年）、博士論文「イギリス大学拡張成立史研究」（広島大学、1987 年）。